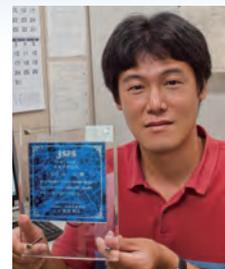


# 外来魚研究というライフワーク ～平成24年度 水産学奨励賞受賞に思う～

さけます資源部 繁殖保全グループ 長谷川 功



**ブラントラウトを追い続けて十数年。  
そんな研究活動の場で出会ったすべての皆さまに感謝します。**

上司が自分のデスクにツカツカやってくるとイヤな予感がする人も多いのではないのでしょうか。しかし、その日はなぜかニコニコ笑顔、(苦言の)嵐の前の静けさかと一層身構えたら「奨励賞が決まったよ」と思いもよらぬ一言。学会賞なんて自分には縁のない話だと思っていたので、推薦されたことさえ忘れていました。

受賞対象となったのは、いまや私のライフワークとなった外来魚研究、とりわけブラントラウトに関する研究です。ブラントラウトは、生物多様性や特に北海道ではさけます資源への悪影響が心配されている反面、釣りの対象として人気のある魚種で、皆が納得する管理方針を見出せていないのが現状です。一連の研究では、北海道千歳市を流れる千歳川を舞台に、主に種間競争(餌や棲み処を巡るけんか)によって川に生息する魚種が在来種のアメマス(イwana)からブラントラウトに置き換わったこと、一方、サクラマス(ヤマメ)とは同じような餌を食べるものの、棲み処が異なるために種間競争はそれほど強く生じず共存している可能性が高いことを指摘しました。ブラントラウトが川に定着する仕組みに関する研究にも取り組みました。例えば、湧水由来で雪解けシーズンにも増水しにくい川に定着していることを明らかにしました。その理由の一つとして、ふ化したばかりの稚魚が流されにくいことがあると考えています。

また、ブラントラウトといえば、在来魚やさけますの放流種苗を食い荒らすことが心配されてきました。そこで、ブラントラウトの食性を調べてみたのですが、在来魚(ヤ

マメ、カジカ、フクドジョウなど)を食べていたのは931匹中36匹でした。つまり、ブラントラウトの主な餌は魚ではなく水生昆虫や水面に落ちた陸生昆虫でした。また、放流直後のサケ稚魚をたくさん捕食していた事例はありましたが、捕食がさけます資源の減少を招いているという科学的根拠は示されていません。「ブラントラウトは魚を食う」というイメージ先行ではなく、客観的に収集された知見を基にブラントラウトの影響や管理方針は議論されるべきです。

振り返れば水研センターでお世話になって今年で7年目となりました。周囲の皆さんのご指導や励ましのおかげで研究を続けることができ、外来魚研究のことを「ライフワーク」と胸を張って言えるまでになりました。改めて、私の研究を支えてくださった皆さんに御礼申し上げます。



写真1 電気漁具を用いたブラントラウトの採集



写真2 ブラントラウトが食べていた放流直後のサケ稚魚



写真3 ブラントラウトの水中写真。川底にいることが多い。